

中京財閥と青木鎌太郎

牧 幸 輝

1. はじめに

本稿はいわゆる中京財閥の特質について、愛知時計電機社長で名古屋商工会議所会頭にもなった青木鎌太郎に着目しながら考察しようとするものである。

「中京財閥」とは言うまでもなく、「三井財閥」や「三菱財閥」といったような一つの企業体ではない。戦前に中京地域で発展した複数の資本系列の総称である。鈴木茂三郎(1935)は「中京財閥の五大支柱」として、伊藤産業合名の伊藤次郎左衛門、瀧兵商店の瀧信四郎、瀧定合名の瀧廣三郎、岡谷合資の岡谷惣助、神野同族の神野金之助を挙げている¹。このうち瀧定は瀧兵の分家である。神野家は富田家と縁戚関係にあり、紅葉屋として共同で事業を行っていた。中京財閥の範囲や定義は定まっていないが、江戸期以来の歴史を有するこれらの同族は資産規模からしてもその代表格であった²。

松下伝吉(1937)は伊藤、岡谷、瀧、紅葉屋(神野・富田)、豊田の5つを中京財閥(名古屋財閥)として取り上げている³。さらにこれらの財閥以外の勢力として、奥田正香、上遠野富之助、青木鎌太郎の3人を挙げ、「この人達は、むろん一財閥の番頭でもなければ、また自ら財閥的な基礎をもつ富豪でも

¹ 鈴木茂三郎(1935)『日本独占資本の解剖』学芸社、113-123頁

² 明治終わりから昭和初めにおいて、これらの同族は愛知県において常に資産額で上位に位置していた。植田欣次(1989)「中京財閥」渋谷隆一、加藤隆、岡田和喜編『地方財閥の展開と銀行』日本評論社、570-571頁。

³ 松下伝吉(1937)『中京財閥の新研究』合資会社中外産業調査会、10頁

なかった。しかし一個の財界人として、この地方の発展に尽して来た指導的な役割は極めて大きなものであった。財的基礎こそ持たなかったが、名古屋財界の参謀本部と云ふべき『名古屋商業会議所』の会頭として、これらの人達は特異の一勢力を占め、常に名古屋財界の動きをリードして来た」と評している。そして当時の名古屋商工会議所会頭だった青木鎌太郎を「今日、名古屋財界を語る場合、財閥相互に介在し、名古屋財界を動かす特異な一勢力として無視することの出来ないもの」として注目している⁴。

結論をやや先取りすれば、青木鎌太郎は富豪でも役人でもない身から愛知時計電機に入社して社長となり、専門経営者でありながら最後には名古屋財界のトップにまで上り詰めた希有な人物であった。そして愛知時計電機は伊藤家、岡谷家、神野家・富田家、瀧家のすべてと人的資本的關係を持ちながら、いずれの同族からも支配を受けることがなかった。この点こそが中京財閥の特質を表していると考えられ、本稿が青木に着目する理由でもある。青木に関してはまとまった伝記などは無く、これまで経営史や企業者史研究において正面から論じられたこともほとんどない。青木は中京財閥においていかなる存在だったのだろうか、そして中京財閥の特質とはどのようなものだったのだろうか。

2. 中京財閥の特質

中京財閥とは複数の資本系列の総称であって、典型的な財閥のように傘下企業を統括する純粹持株会社があるわけではない。それにもかかわらず、中京財閥という呼称が使われて議論の対象となってきたのは、それがあたかも一つの企業体であるかのような様相を呈していたからである。

例えば鈴木茂三郎（1935）は、中京財閥について「松坂屋と伊藤銀行を中心とする伊藤次郎左衛門を盟主に『九日会』のもとに集合したゆるやかな地方的な資本閥の連合体として発達したものであるので、各個の資本の交錯、結合し

⁴ 松下伝吉（1937）301-307頁

た産業が多い」と評している⁵。樋口弘（1940）も「個々の財閥が独立したものであると共に、全体としてこれらの連絡した、ゆるやかな一個の中京財閥なるものを形成している」と指摘している⁶。

この“ゆるやかな連合体”について『愛知銀行四十六年史』では次のように説明している。「当時（1896年設立時—牧）の名古屋財界を大観するに大体三派の系統が色別される様である。第一は徳川家を中心とした所謂清州越の一統、第二は名古屋市の近在からの出身者即ち瀧一派、第三は外来の財閥がそれである。而してこの系統は極めて明瞭に銀行業に現れた。即ち名古屋銀行は主として郡部出身の財界人から組織され、明治銀行は奥田正香氏等の外来財閥によって組織され（奥田氏自身は尾張藩の旧臣）而して本行は徳川家を中心とする財閥によって組織」された⁷。

同様に、名古屋産業史の代表作として長年読み継がれている杉浦英一（城山三郎）の『中京財界史』でも土着派（伊藤、岡谷など）、近在派（瀧系、神野・富田の紅葉屋系など）、外様派（奥田系）の3つに分類している⁸。銀行に当てはめれば愛知銀行は土着派、名古屋銀行は近在派、明治銀行は外様派に色分け出来る。こうした見方は、重役兼任状況から愛知県の企業家ネットワークを

⁵ 鈴木茂三郎（1935）113-123頁。九日会とは尾張徳川家に入出入りしていた旧家を中心とした親睦団体で、伊藤家や関戸家、岡谷家、富田家、神野家、瀧家などが名を連ねていた。青木鎌太郎（1951）『中京財界五十年』中部経済新聞社、18頁。

⁶ 樋口弘（1940）『日本財閥論 下巻』味燈書屋、106頁

⁷ 大澤吉五郎（1944）『愛知銀行四十六年史』株式会社東海銀行、9頁

⁸ 同書は1956年の初版後、1994年に城山三郎『創意に生きる』のタイトルで復刊され、2008年にも再刊されている。同書は名古屋の企業者活動を包括的にまとめており、読みやすく優れた作品であるが、原文は中部経済新聞の連載記事であるために出典が明記されていないという難点がある。杉浦英一（1956）『中京財界史』中部経済新聞社、城山三郎（1994）『創意に生きる—中京財界史』文藝春秋。また、同書の記述に関する誤りを指摘する論稿もある。安保邦彦（2009）「城山三郎著『中京財界史』の歴史的記述の正誤問題について」『東邦学誌』第38巻第1号、愛知東邦大学。

考察した鈴木恒夫他（2009）によっても裏付けられている⁹。

そして、これら3つのグループは銀行業に典型的に見られたように競争し合い、時には日本車輛製造のように敵対的な買収事件が起きることもあった¹⁰。一方で、これらのグループは必ずしも互いに排他的というわけではなかった。3グループが共同で事業に関与することもあり、そうした“各個の資本の交錯、結合”する様相が中京財閥の特質として認識されてきたのである。

もともと複数の資本家による共同出資は全国的に見られた現象であり、名古屋に限ったわけではない。ただ名古屋の場合、東京や大阪のように大財閥が存在しないため、銀行や保険、インフラ関連などの近代工業への出資は少数の有力な財界人に集中する傾向があった。そのことが地域経済において3グループを中心とした名古屋財界の影響力を増大させ、交錯した資本関係やさらには縁戚関係も相俟って中京財閥と呼ばれるようになったのである¹¹。青木謙太郎の愛知時計電機は、そうした名古屋財界の共同的企業の一つであった。

3. 愛知時計製造の設立と経営体制

(1) 愛知時計製造の設立

愛知時計電機の歴史は明治中頃（1893年）にまでさかのぼる。名古屋で代々続く素封家の五明良平が中心となり、五十川卯三郎、原田鑑次郎、水野伊兵衛、長谷川喜七とともに愛知時計製造合資会社を設立したのが始まりだった。創業メンバーの内、水野伊兵衛と長谷川喜七は、かんざしやブローチ、金具などを製作する鋳屋（かざりや）であった。水野は愛知時計製造の設立前年に水野時計製造所を立ち上げ、長谷川を職長としてボンボン時計（掛時計）の製造を始

⁹ 鈴木恒夫、小早川洋一、和田一夫（2009）『企業家ネットワークの形成と展開』名古屋大学出版会

¹⁰ 植田欣次（1989）「中京財閥」渋谷隆一、加藤隆、岡田和喜編『地方財閥の展開と銀行』日本評論社、585-597頁

¹¹ 伊藤家と岡谷家、瀧家と富田家、富田家と神野家はそれぞれ縁戚関係にある。

めていたが、翌年愛知時計製造と合流した¹²。

日本の時計製造は、江戸期には西欧技術から切り離された和時計の生産が約2世紀続いていたが、明治初年以來、安価な米国製ボンボン時計が大量に輸入され、さらに1873年の太陽曆採用によって和時計は姿を消していった¹³。こうした中、名古屋で米国製時計の販売をしていた林市兵衛（初代）の息子、竹松が1886年にボンボン時計の製作に成功し、その後、幾度の困難を経ながらも1891年に林時計製造所を設立し、動力に蒸気機関を使用して本格的な時計製造を開始した¹⁴。東京でも時計販売に従事していた服部金太郎が、1892年に精工舎を設立して時計製造に乗り出すなど、国内において近代的な時計製造業が生成しつつあった。

愛知時計製造はその後、水野静太郎、加藤兼次郎、加藤助次郎の3名が経営に加わり、資本金も2万円から5万円に増資したが「従業員不熟練ナルタメ製品ノ成績充分ナラス種々苦心之レカ経営ヲナシタルモ每期欠損重ネ殆ント維持ノ途ナキニ至」った。そのため「一大改革ノ必要」を感じ、1898年に資本金を8万円にして株式会社に改組した。この時、株式会社設立の発起人として、合資会社に関わった五明良平、五十川卯三郎、加藤兼次郎、水野静太郎、長谷川喜七の5名以外に鈴木惣兵衛と水野松造が加わった。改革の最大の目玉は、発起人の筆頭者となり、社長に就任した鈴木惣兵衛であった¹⁵。

¹² 吉田浅一（1953）『名古屋時計業界沿革史』商工界、11頁、22頁。愛知時計電機株式会社（1984）『愛知時計電機85年史』6-8頁。幕末に名古屋の下級武士には内職として鋳屋をするものが多かったという。

¹³ 武知京三（1980）『わが国掛時計製造の展開と形態』国際連合大学、2頁

¹⁴ 吉田浅一（1953）10-21頁。愛知時計電機（1984）10頁。竹松（二代目林市兵衛）は、林時計製造所に先立ち、中條勇次郎らとともに時盛舎を設立して時計の試作に取り組んでいる。

¹⁵ 愛知時計電機株式会社（1923）『創立二十五季記念誌』15頁

(2) 鈴木惣兵衛の参画

鈴木惣兵衛は、元禄初期（1690年）から続く「材木屋惣兵衛」（材惣）の8代目当主である。惣兵衛は幼名を茂三郎と言い、名古屋の酒造商・日比野茂兵衛の長男であったが、1874年に鈴木家の養子となり翌年20才で家督を相続した¹⁶。惣兵衛は困難な状況にあった家業を立て直したほか、名古屋市会議員や名古屋商業会議所副会頭を務める名古屋財界の重鎮であった¹⁷。

改組された愛知時計製造の役員には鈴木社長以下、常務取締役に五明良平と加藤兼次郎、取締役兼支配人に水谷嘉助、監査役に五十川卯三郎と水野松造が選任された。設立当初の株主は五明良平が290株（持株比率18.1%）、次いで加藤兼次郎が210株（同13.1%）、五十川卯三郎が177株（同11.1%）、加藤助次郎が108株（同6.8%）、鈴木惣兵衛が100株（同6.3%）であった（表1）。他にはこれら創業者の関係者と思われる株主名がいくつかあるが、財界の主要メンバーと思しき名前は見当たらない。

惣兵衛はこの時すでに複数の企業設立に関与していた。1893年には名古屋生命保険が設立されて惣兵衛が社長となった。同年に設立された名古屋倉庫では発起人、名古屋株式取引所では監査役に就任した。1896年には明治銀行が設立されて惣兵衛は取締役を選任された。同年設立の日本車輛製造では発起人及び監査役に名を連ねた。これら企業の設立は周知のように奥田正香の主導によるものであった。奥田は“名古屋の渋沢栄一”とも称されるように、明治期に多くの会社創設に関わり、名古屋の工業化に多大な貢献をした人物である。奥田と惣兵衛はこの頃、名古屋商業会議所で会頭と副会頭という立場にあり緊

¹⁶ 愛知時計電機（1984）6-8頁

¹⁷ 惣兵衛は1889年から1921年まで32年間に亘り名古屋市会議員を務め、この間、市会議長も経験した。名古屋商業会議所の副会頭は1891年から1913年まで務め、在任中の会頭は最初の1年半は鈴木善六、次の20年は奥田正香であった。名古屋商工会議所（1971）『名古屋商工会議所九十年史』1097-1101頁。武市雄図（1929）『鈴木鹿山伝』鹿山会、20頁。材惣木材株式会社（1991）『材惣三百年史』164-165頁。

表 1 愛知時計製造の主要株主（1898年12月時点）¹⁸

株主名	持株数	持株比率 (%)
五明良平	290	18.1
加藤兼次郎	210	13.1
五十川卯三郎	177	11.1
加藤助次郎	108	6.8
鈴木惣兵衛	100	6.3
水野松造	70	4.4
長谷川喜七	57	3.6
水谷嘉助	57	3.6
水野静太郎	50	3.1
棚橋愛次郎	42	2.6
加藤トメ	40	2.5
鈴木ノフ	40	2.5
恒川徳右衛門	30	1.9
五明十三郎	28	1.8
その他	301	18.8
総発行株数	1,600	100.0

注) 資本金 8 万円 (内払込金 4 万 7,250 円)、株主数 46 名
出所) 愛知時計電機株式会社 (1923) 『創立二十五季記念誌』 5 頁

密な関係にあった¹⁸。

惣兵衛が愛知時計製造の経営に参画したのは、創業者の五明と縁戚関係にあったことが直接の契機であった¹⁹。時計の製造には外函に木材が使用されるが、惣兵衛の材木会社と愛知時計製造の間に特筆すべき取引関係があった形跡は見られない。近代工業としての時計工業の重要性は認識していたにしても、惣兵衛にとっては同社も複数ある出資会社の一つに過ぎなかったのではないだろうか。家業の材木事業においては、当時まだ珍しかった複式簿記や米国製機械を導入したりして近代化を進めていたが、材木業から離れて製造業へ積極的

¹⁸ 鈴木恒夫、小早川洋一、和田一夫 (2009) 318-347頁

¹⁹ 武市雄図 (1929) 85頁。惣兵衛の弟の日比野広吉と五明の妹が婚姻関係にあった。

に進出することはその後もなかった²⁰。一方で、愛知時計製造にとっては摠兵衛の存在が会社の知名度と信用向上に少なからず寄与したことは間違いない。結果として同社はその後、財界主要メンバーの支援を得て、名古屋財界を代表する企業となっていくのである。

(3) 鈴木体制下の役員構成

鈴木摠兵衛体制となつてからの愛知時計製造の役員構成を確認してみよう。資料の制約上、同社の営業報告書は1920年上半期（第44期）以降分しか確認出来ないため、それ以前の役員構成は1923年発刊の『創立二十五季記念誌』に依拠する。1899年に監査役の五十川卯三郎が亡くなったため新たに伊藤桑吉が監査役に就任した。1901年には監査役だった水野松造が取締役となり、代わりに摠兵衛の弟の日比野広吉が監査役となった。1904年には常務取締役の加藤兼次郎が取締役に退き、青木鎌太郎が新たに常務取締役となっている。1907年には創業当初からのメンバーだった加藤兼次郎が監査役を辞任し、代わりに熊田喜平治が就任した。これら役員の実性は必ずしも明らかでないが、財界の有力者とは言えなかった。

1912年7月に愛知時計製造は、愛知時計電機と社名変更した。同社は日露戦争の始まった1904年に陸軍砲兵工廠から砲弾の信管部分品の発注を受け、兵器生産を開始していた。この年、名古屋の熱田には東京砲兵工廠の兵器製造所が設けられていた。その後、海軍工廠からも信管や機雷、魚雷発射管、電気機械の製作を依頼された。社内組織も時計部と電機部に分離された。社名変更はこうした事業内容の変化を反映したものだ²¹。

1913年12月、摠兵衛は奥田正香の後任として名古屋商業会議所会頭の座についた（表2）。摠兵衛はその後、1920年まで7年間に亘り会頭を務めること

²⁰ 材摠木材（1991）57頁

²¹ 愛知時計電機（1984）46-50頁

になる。愛知時計電機ではその後も若干の役員変更が行われたが、1917年になると大きな変化が起きる。この年、監査役として岡谷清治郎が新たに加わり、翌年には岡谷清治郎、富田重助、林冀一が取締役に、渡邊義郎、大三輪奈良太郎、大岩勇夫が監査役に選任された。さらに、1920年には伊藤守松が監査役となった²²。名古屋財界の主要メンバーが顔を揃え、愛知時計電機の役員構成は一変したのである（表3）。

表2 名古屋商工会議所の歴代会頭

	会頭名	就任年月
初代	伊藤次郎左衛門（14代祐昌）	1881（明治14）年3月
2代	山本新治郎	1885（明治18）年2月
3代	鈴木善六	1888（明治21）年3月
4代	堀部勝四郎	1891（明治24）年7月
5代	鈴木善六	1891（明治24）年11月
6代	奥田正香	1893（明治26）年7月
7代	鈴木惣兵衛（8代）	1913（大正2）年12月
8代	上遠野富之助	1921（大正10）年1月
9代	伊藤次郎左衛門（15代祐民）	1927（昭和2）年11月
10代	岡谷惣助（清治郎）	1933（昭和8）年1月
11代	青木鎌太郎	1936（昭和11）年12月
12代	高松定一	1940（昭和15）年11月
13代	青木鎌太郎	1943（昭和18）年9月
14代	三輪常次郎	1946（昭和21）年8月

出所）名古屋商工会議所（1971）『名古屋商工会議所九十年史』1097-1099頁

²² 愛知時計電機（1923）16-20頁

表3 愛知時計電機の役員構成（1921年6月時点）

役職	氏名
取締役社長	鈴木惣兵衛
常務取締役	青木鎌太郎
取締役	五明良平
取締役	岡谷清治郎
取締役	富田重助
取締役	林冀一
支配人	増本敏三郎
監査役	渡邊義郎
監査役	大三輪奈良太郎
監査役	伊藤守松
監査役	大岩勇夫

出所) 愛知時計電機株式会社『第46期営業報告書』1921年6月

(4) 名古屋財界との関係強化

この時の新役員顔ぶれを詳しく見てみよう。岡谷清治郎は、1669年（寛文9年）に名古屋の鉄砲町で創業された金物商「笹屋」の岡谷家出身である。清治郎はその後1926年に家督を相続して岡谷惣助（10代）を襲名する²³。岡谷家と伊藤家は姻戚関係にあり、江戸期からの御用商人の系譜をひく土着派の代表格であった。岡谷家と関係の深かったのが愛知銀行であり、渡邊義郎は同行頭取であった。愛知銀行は徳川義礼（尾張徳川家18代当主）、伊藤次郎左衛門（14代祐昌）、岡谷惣助（9代）らが発起人となって1896年に設立された。渡邊は日本銀行名古屋支店長から愛知銀行に迎えられ、1909年に初代頭取の岡谷惣助（9代）に代わって頭取に就任した。その後1941年に愛知銀行、名古屋銀行、伊藤銀行の3行が合併して東海銀行が誕生するまで30年以上に亘り頭取を務めた実力者である²⁴。

²³ 名古屋毎日新聞社（1936）『中京名鑑』96頁

富田重助は小間物や舶来品等を扱う紅葉屋の富田家4代目当主である。先代の3代目重助は神野家から富田家に養子入りしたため神野家とは縁戚関係にある。先代が若くして亡くなった後、4代目重助は叔父の神野金之助（初代）とともに名古屋で複数の企業設立に関わり、「紅葉屋財閥」と呼ばれることもある。この神野家・富田家と関係の深いのが明治銀行であり、大三輪奈良太郎はその頭取であった。同行の初代頭取は奥田正香、取締役には神野金之助（初代）、富田重助（4代）、そして鈴木摠兵衛らが名を連ねていた。奥田は名古屋株式取引所理事長と銀行頭取との兼務を避けるため、まもなく経営から離れ、その後は神野家・富田家が経営の中心になっていた。神野金之助（初代）は第3代頭取を務め、続く第4代頭取が大三輪であった²⁵。

大岩勇夫は弁護士出身の政治家で、名古屋市議員や愛知県議会議員、衆議院議員を歴任し、愛知時計電機監査役に就いた時には名古屋市会議長であった。摠兵衛も名古屋市議員であったから大岩とは親交があった。大岩はその後1927年には名古屋市長に当選している。

林冀一は海軍から招聘された技師である。愛知時計電機はこの頃から海軍との関係を深め、1920年からは航空機事業に乗り出していく。

伊藤守松は、1611年（慶長16年）創業のいとう呉服店（後の松坂屋）の伊藤家出身で、その後1924年に伊藤次郎左衛門（15代祐民）を襲名する。先代（14代祐昌）は愛知銀行やその前身となった第十一国立銀行の設立に関わったほか、1881年に名古屋最初の私立本店銀行として伊藤銀行を設立するなど、伊藤家

²⁴ 株式会社東海銀行（1961）『東海銀行史』16-20頁。西村はつ（2008）「有価証券所有からみた名古屋有力3行（愛知、名古屋、明治）の経営（1920-32）」『地方金融史研究』第39号、26頁。

²⁵ 西村はつ（2002）「中京金融界の動揺と明治銀行—明治銀行の休業と債務整理過程を中心に—」『地方金融史研究』第33号、75-78頁。大三輪は日本銀行金沢支店長から1914年に明治銀行に招かれ、1917年に頭取に就任した。大三輪の後任には富田重助（4代）が第5代頭取を務めた。

の資金力と存在感は名古屋財界において別格であった²⁶。守松は摠兵衛の名古屋商工会議所会頭時代の副会頭でもあり、両者は緊密な関係にあった²⁷。

摠兵衛はなぜこの時に大幅な役員の入替えをしたのであろうか。大きな理由として考えられるのは、愛知時計電機の資金需要のためである。同社は1916年には資本金を15万円から35万円に増資し、翌年には100万円、翌々年には200万円、1920年には500万円に増資した。表4で1920年5月時点の主要株主を見ると、大三輪奈良太郎6,900株（持株比率6.9%）、渡邊義郎6,900株（同6.9%）、岡谷清治郎4,000株（同4.0%）、大岩勇夫3,700株（同3.7%）、富田重助3,310株（同3.3%）が新たに株主となっている²⁸。同社は1921年には飛行機、兵器部門を拡張移転するために名古屋市南区船方に新工場を建設しており、この時期に同社は事業拡大を進めていたのである。

摠兵衛は外様派の奥田正香と関係が深く、鈴木恒夫他（2009）でも“奥田ネットの中核かつ名古屋財界における奥田正香の後継者”と位置付けられている²⁹。しかし、愛知時計電機では外様派のみならず、土着派（伊藤家、岡谷家）と近在派（神野家、富田家）をも取り込んで、同社を一介の時計会社から名古屋財界の共同的企業へと発展させたのだった。これを可能にしたのは3グループのいずれとも関係を有し、名古屋商工会議所会頭でもあった摠兵衛の人的ネットワークであったことは確かであろう。

²⁶ 東海銀行（1961）12頁、41頁。愛知銀行は1877年設立の第十一国立銀行（初代頭取伊藤次郎左衛門）と1878年設立の第百三十四国立銀行（初代頭取岡谷惣助）を事実上吸収して設立された。

²⁷ 守松は1913年から1927年まで副会頭、その後1927年から1933年まで第9代会頭を務めた。

²⁸ 株主名簿では法人名義と個人名義は区別されており、この時の大三輪、渡邊の出資は銀行名義ではなく個人名義であった。愛知時計電機株式会社『第44期営業報告書』1920年6月。

²⁹ 鈴木恒夫、小早川洋一、和田一夫（2009）305頁

表4 愛知時計電機の主要株主（1920年5月時点）

株主名	持株数	持株比率(%)
鈴木惣兵衛	12,760	12.8
青木鎌太郎	10,435	10.4
大三輪奈良太郎	6,900	6.9
渡邊義郎	6,900	6.9
五明良平	4,160	4.2
岡谷清治郎	4,000	4.0
大岩勇夫	3,700	3.7
水谷嘉助	3,440	3.4
富田重助	3,310	3.3
鈴木鈴四郎	2,200	2.2
水野土佐次郎	2,075	2.1
五明得一郎	2,000	2.0
磯貝浩	1,440	1.4
その他	36,680	36.7
総発行株数	100,000	100.0

注1) 資本金500万円（内払込金182万5千円）、株主数191名

注2) 持株比率は小数点第2位以下を四捨五入

注3) 持株数は甲乙丙丁戊の各種株式の合計

出所) 愛知時計電機株式会社『第44期営業報告書』1920年6月

4. 青木鎌太郎と愛知時計電機

(1) 青木鎌太郎の生い立ち

五明良平によって創業された愛知時計製造は、惣兵衛によって名古屋財界の共同事業としての性格を与えられることになった。この間、ある人物の存在感が同社において高まっていた。青木鎌太郎である。既述のように1904年に創業メンバーの加藤兼次郎に代わって、青木が常務取締役役に就任した。それまで役員でも大株主でもなかった青木が社長の惣兵衛、創業者の五明に次ぐ役職に抜擢されたことは異例である。青木鎌太郎とはどういう人物であったのだろうか。

青木は1874年に名古屋の富澤町（現在の中区の一部）で生まれた。父の與

吉は幕末には下級武士であり、明治維新後は富澤町で「新屋（あたらしや）」という旅館を経営していた³⁰。青木は7人兄弟だったがそのうち6人が亡くなったため、実質的な跡継ぎだった。しかし宿屋業を嫌い、高等小学校を卒業してからは名古屋の神宮皇学館出張所で1年ほど漢学を学んだ後、ラムネ製造や酒の販売など色々な仕事に関わった。どれも長続きしなかったが、製造業で身を立てたいと少年期から考えていたという。その後23才くらいの時（1897年頃）に鉄工場を営む山田鉄次郎と共同で時計製造を始めた³¹。

ちょうどその頃、名古屋では多くの時計製造業者が誕生していた。1895年に明治時計製造合資会社、1896年に尾張時計製造合資会社が設立され、名古屋は東京と並ぶ時計の国内生産拠点となっていっていった。名古屋の場合は個人企業や合資会社の形態が多く、比較的規模が小さいのが特徴であった³²。青木の時計製造所もそうした零細業者の一つであった。

（2）愛知時計製造への入社と役員就任

摠兵衛を社長に迎えた愛知時計製造では、新たに海外輸出に着目して「神戸横浜ノ各貿易商へ多額ノ見本品ヲ送り其注文ヲ受ケ多少ノ損失ヲ顧ミス販路ノ開拓ニ努メ」て、製品の大部分を輸出に振り向けた。ところが1900年に北清事変が勃発すると「輸出販路杜絶シ延テ内地モ到ル處商況不振ノ姿ニテ製品停滞シ価格低落シ為メニ上下両期ヲ通シ終ニ欠損ヲ生シ同業者又孰レモ経営難ヲ感」じることになった。そのため、「同業相協力共同シテ売捌ノ途ヲ講スルコト、ナリ八月神戸ニ共同販売店ヲ設置シ青木鎌太郎氏ヲ選ハレテ之レカ主任トナリ専ラ製品ノ売捌ニ従事」することになった³³。

³⁰ 與吉は、幕末には下級武士として牢屋の看守のような仕事をしており、牢屋の近くに未決囚を泊める宿屋を開業したのが始まりであったという。山口達郎、渡部茂（1935）『人と力』日本公論社、65頁。松下伝吉（1937）312頁。

³¹ 青木鎌太郎（1951）51-52頁。同書は青木が口述したものを中部経済新聞社がまとめたものである。

³² 武知京三（1980）5、6頁

そこで青木は上海へ単独渡航し、滞貨となっていた名古屋製時計をすべて売り捌いたという。この活躍を知った摠兵衛の勧めで1901年7月に愛知時計製造に入社することになった³⁴。そして入社3年後には常務取締役役に抜擢され、実質的に経営を取り仕切ることになったのだった。

とはいえ、この頃の愛知時計製造は会社設立時と株主構成に大きな変化はないはずだから、オーナーは五明や鈴木であり青木は番頭であったに過ぎない³⁵。ところが会社が発展するにつれて専門経営者の青木の立場も変化していった。表4を見ると1920年5月時点で鈴木摠兵衛12,760株（持株比率12.8%）が筆頭株主となり、次いで青木鎌太郎10,435株（同10.4%）、創業者の五明良平は4,160株（同4.2%）となっている。創業者でも素封家でもなく、一社員に過ぎなかった青木が創業者の五明をも上回り、第2位の株主として台頭してきたのである。

(3) 鈴木摠兵衛の死去と青木の社長就任

1925年12月、鈴木摠兵衛が死去した。その数か月前には五明良平も亡くなっていた³⁶。社長と創業者を相次いで失う事態が生じたのである。これを受けて翌年3月に青木が社長に就任した。他の役員は取締役が岡谷惣助（清治郎）、富田重助（4代）、増本敏三郎（支配人兼務）、監査役が渡邊義郎、伊藤次郎左

³³ 愛知時計電機（1923）1頁、7頁。なぜ青木が選ばれたのかは不明だが、一時期、神戸のイリス商会で働いた経験があり貿易実務に通じていたとの話もある。高島耕二編（1937）『名古屋商工会議所議員名鑑』総合経済研究所、24頁。名古屋毎日新聞社（1936）『中京名鑑』285頁。

³⁴ 青木鎌太郎（1951）52-56頁

³⁵ 同社は1902年7月には資本金を8万円から4万円に減資しており、株主が増える余地はなかった。青木の回想録では、入社するには株を持った方がよいと勧められ、時価で350余株を譲り受けたとしているが、設立当初の五明の持株数が290株、鈴木摠兵衛が100株であったことからすれば、350余株というのはもっと後の話であろう。青木鎌太郎（1951）57頁。

³⁶ 五明良平は1925年3月6日に死去。愛知時計電機『第54期営業報告書』1925年6月。

衛門（15代祐民）、神野金之助（2代）であった³⁷。

実質的に経営を取り仕切り、大株主でもあった青木が社長に就任することは順当な昇進と言えなくもない。岡谷家、富田家、伊藤家、神野家にとっては、もとより資産保全が重要であるから、有能な経営者である青木に異論はなかったであろう。問題となり得るのは鈴木家である。筆頭株主は鈴木惣兵衛であり、その功績の大きさからしても鈴木家から社長を出す選択肢もあったはずである。

鈴木家には惣兵衛の後継者として鈴四郎がいた。鈴四郎は8代目惣兵衛の二女と結婚した婿養子で、先代の死後、9代惣兵衛を襲名して材惣の代表に就任した³⁸。しかし、愛知時計電機では1926年6月の役員改選で鈴四郎は取締役になったものの、その後も社長に選出されることはなかった³⁹。（表5）

既述のように鈴木惣兵衛にとって愛知時計電機は、日本車輛製造や明治銀行

表5 愛知時計電機の役員構成（1926年12月時点）

役職	氏名
取締役社長	青木謙太郎
取締役	岡谷惣助
取締役	富田重助
取締役	伊藤次郎左衛門
取締役	鈴木惣兵衛（鈴四郎）
取締役兼支配人	増本敏三郎
監査役	渡邊義郎
監査役	神野金之助
監査役	瀧定助

出所) 愛知時計電機株式会社『第57期営業報告書』1926年12月

³⁷ 愛知時計電機『第56期営業報告書』1926年6月

³⁸ 材惣木材（1991）59-61頁

³⁹ 愛知時計電機『第57期営業報告書』1926年12月。この時の改選では新たに瀧定助が監査役に選任された。瀧家出身の役員は初めてだった。

と同じく複数ある関係会社の一つに過ぎず、鈴木家が積極的に製造業に乗り出す意向は持っていなかった。伊藤家や岡谷家、富田家などを参画させて名古屋財界の共同事業としたことは、むしろその証左と言えよう。共同事業であったがゆえに、鈴木家の家業とはならず、実際の経営は専門経営者である青木が担っていたのである。そして青木は、この安定株主を背景に経営に専念することが出来たといえよう。

こうした事実からは、しばしば指摘されるように名古屋の旧特権商人を系譜にもつ有力商人の保守性を見出すことが出来る⁴⁰。鈴木家も家業の材木事業に注力し、愛知時計電機においては資本家としての立場以上に深く関与することはなかったのである。

(4) 青木体制の確立

社長となった青木は社内外で一層力を強めていく。愛知時計電機も軍需の増大に伴って、事業規模は拡大の一途を辿っていった。青木は“超人的な活動力”を持ち、“爆撃機”とか“機関車”と呼ばれる仕事ぶりであったという⁴¹。1932年11月には名古屋商工会議所の副会頭に選ばれた。在任中の会頭は伊藤次郎左衛門（15代祐民）と岡谷惣助（清治郎）であった⁴²。青木は伊藤、岡谷という中京財閥の双璧と肩を並べるまでになったのである。

鈴木家では1932年7月に9代目惣兵衛（鈴四郎）が亡くなり、10代目となる惣一郎が家督を相続した。惣一郎は翌年、愛知時計電機の取締役となり、ま

⁴⁰ 村上はつ（1979）「明治・大正期における名古屋旧有力商人の企業者活動」『経営史学』第14巻第3号、84頁

⁴¹ 名古屋毎日新聞社（1936）『中京名鑑』285頁。杉浦英一（1956）『中京財界史（下巻）』中部経済新聞社、51頁。

⁴² 青木の副会頭在任は1936年12月まで。名古屋商工会議所（1971）『名古屋商工会議所九十年史』1097-1099頁。なお、名古屋商業会議所は1928年に名古屋商工会議所に改組している。

た 1936 年 10 月に愛知時計電機が分離独立させた愛知化学工業社長に就任した⁴³。愛知化学工業の取締役には増本敏三郎、五明得一郎、平野常樹、監査役に伊藤松之助、富田重助（5代）が名を連ねていた⁴⁴。五明得一郎は五明良平の子息、平野常樹は青木鎌太郎の長女の夫、伊藤松之助は伊藤次郎左衛門（16代祐茲）である⁴⁵。

では、この頃の愛知時計電機の株式所有構造はどうなっていたのだろうか。表 6 にあるように鈴木惣一郎が 22,530 株（持株比率 7.5%）を所有し筆頭株主であった。青木鎌太郎は 21,000 株（同 7%）、次いで五明得一郎が 17,700 株（同 5.9%）となっている。鈴木家と五明家は依然として大株主であったが、惣一郎や得一郎は愛知時計電機の社長ではなく、子会社の役員として処遇されたのだった⁴⁶。

愛知時計電機の役員の中で増本敏三郎のことも触れておこう。増本は山梨県出身で早稲田大学を卒業後、名古屋商業会議所に入所して書記長を務めた。そこで惣兵衛に認められ、1919 年に愛知時計電機に支配人として迎えられた。惣兵衛死去後に青木が社長になると増本は常務取締役に進出した⁴⁷。戦時中には青木の後を受けて社長に就任する。鈴木家は自ら経営に乗り出すことはしなかったが、惣兵衛が外部から登用した青木と増本は、確実にその期待に応えて

⁴³ 材惣木材（1991）63-64頁

⁴⁴ 愛知時計電機（1984）201-203頁

⁴⁵ 青木には一男一女があり、長女は愛知時計電機支配人となる平野常樹夫人となり、長男の清は東京ガスに勤務した。長男清の岳父は、一時期、日本銀行名古屋支店長を務め、後に大蔵大臣や日本興業銀行総裁、日本商工会議所会頭、日本銀行総裁となった結城豊太郎である。青木は妻に先立たれ、再婚した妻も亡くなったため、人一倍感子煩悩であったという。山口達郎、渡部茂（1935）75頁、77頁。

⁴⁶ 五明得一郎は戦後、愛知時計電機から分離した新愛知起業（現・愛知機械工業）の社長に就任している。

⁴⁷ 名古屋毎日新聞社（1936）『中京名鑑』243頁。愛知時計電機（1923）19頁。愛知時計電機『59期営業報告書』1927年12月。増本が名古屋商業会議所に入所したのは、大学の同窓でかつて書記長を務めた上遠野富之助の知遇を得たためである。

表6 愛知時計電機の主要株主（1937年5月時点）

株主名	持株数	持株比率(%)
鈴木惣一郎	22,530	7.5
青木鎌太郎	21,000	7.0
五明得一郎	17,700	5.9
岡谷保産合名会社 代表社員 岡谷惣助	10,500	3.5
株式会社愛知銀行 取締役頭取 渡邊義郎	9,750	3.3
神野金之助	8,470	2.8
株式会社養和会 代表取締役 富田重助	6,910	2.3
株式会社松坂屋 取締役社長 伊藤松之助	5,925	2.0
水野兼吉	5,265	1.8
福寿生命保険株式会社 取締役社長 神野金之助	5,020	1.7
加藤勝太郎	4,770	1.6
帝国生命保険株式会社 取締役 朝吹常吉	4,740	1.6
磯貝浩	4,290	1.4
松岡嘉右衛門	4,005	1.3
水谷鏡一	3,850	1.3
白石勝彦	3,810	1.3
富田重助	3,745	1.2
伊藤次郎左衛門	3,705	1.2
鈴木れい	3,685	1.2
岡谷惣助	3,105	1.0
徳川義親	3,000	1.0
その他	144,225	48.1
総発行株数	300,000	100.0

注1) 資本金 1,500 万円（内払込金 532 万 5 千円）、株主数 464 名

注2) 持株比率は小数点第2位以下を四捨五入

注3) 持株数は甲乙丙丁戊の各種株式の合計
出所) 愛知時計電機株式会社『第78期営業報告書』1937年6月

活躍したのだった。

1936年12月、青木は名古屋商工会議所会頭に就任した⁴⁸。愛知時計製造の一社員から名古屋財界のトップにまで上り詰めたのである。しかも専門経営者でありながら、実際には愛知時計電機の大株主にもなっていた。これは森川英正がかつて指摘した「専門経営者の資本家化」にほかならない⁴⁹。戦前には専門経営者が多額の役員報酬を得て、大株主となって会社を支配する事例が少なからず見受けられた。青木もまた資本家としての力を蓄えることで、名古屋財界において地歩を築き、最後には会頭の座を手中に収めることになったのである。

5. おわりに

青木鎌太郎の登場は中京財閥自体の変化を表していた。江戸期以来の有力商人を中心とした体制から、重工業を基盤とした新興の企業家が勢力を持つようになってきたのである。青木と同時期に名古屋商工会議所副会頭となる豊田利三郎や大隈栄一、下出義雄らが好個の例であろう。彼らは旺盛な事業意欲を持ち、特に機械金属工業において積極的な経営を展開した。

中京財閥の特質としての“資本の交錯、結合”は、愛知時計電機においては経営の安定を確保する要因として機能した。同社は3グループすべてが関わる名古屋財界の共同的企業であったが、鈴木惣兵衛をはじめ、伊藤家、岡谷家といった同族の“保守性”がむしろプラスに作用したともいえよう⁵⁰。そうした条件の下で専門経営者である青木が登場し、さらに「専門経営者の資本家化」によって財界トップの地位にまで上り詰めたのであった。

⁴⁸ 1940年10月まで11代会頭を務めた。

⁴⁹ 森川英正（1981）『日本経営史』日本経済新聞社、157-163頁

⁵⁰ 豊田利三郎も名古屋財界の人的ネットワークを利用して資本の拡充をしている。牧幸輝（2011）「豊田利三郎と豊田業団—経営構想、企業家ネットワークと同族経営体制」『経営史学』第46巻第2号。

青木に率いられた愛知時計電機は、やがて日本有数の航空機メーカーへと発展する。青木は戦時下の1943年に名古屋商工会議所が愛知県商工経済会に改組されると、異例にも会頭に再登板した⁵¹。愛知時計電機が軍需企業であったこともあるが、青木以上の人材がもはや中京財閥にはいなかったのである。この頃すでに中京財閥の主要メンバーだった瀧家や神野家、富田家、そして鈴木家はかつての勢いを失っていた。明治以降の名古屋の近代化に貢献してきた「中京財閥」は歴史的役割を終えつつあったのである。

以上

⁵¹ この時の会頭在任期間は1943年9月から1946年1月まで。就任時に青木は愛知時計電機の会長となり、増本敏三郎が社長となった。

<参考文献>

- 愛知時計電機株式会社『営業報告書』各期
愛知時計電機株式会社（1923）『創立二十五季記念誌』
愛知時計電機株式会社（1984）『愛知時計電機 85 年史』
青木鎌太郎（1951）『中京財界五十年』中部経済新聞社
安保邦彦（2009）「城山三郎著『中京財界史』の歴史的記述の正誤問題について」『東邦学誌』第 38 巻第 1 号、愛知東邦大学
植田欣次（1989）「中京財閥」渋谷隆一、加藤隆、岡田和喜編『地方財閥の展開と銀行』日本評論社
大澤吉五郎（1944）『愛知銀行四十六年史』株式会社東海銀行
材摠木材株式会社（1991）『材摠三百年史』
杉浦英一（1956）『中京財界史』中部経済新聞社
鈴木茂三郎（1935）『日本独占資本の解剖』学芸社
鈴木恒夫、小早川洋一、和田一夫（2009）『企業家ネットワークの形成と展開』名古屋大学出版会
高島耕二編（1937）『名古屋商工会議所議員名鑑』総合経済研究所
武市雄図（1929）『鈴木鹿山伝』鹿山会
武知京三（1980）『わが国掛時計製造の展開と形態』国際連合大学
株式会社東海銀行（1961）『東海銀行史』
名古屋商工会議所（1971）『名古屋商工会議所九十年史』
名古屋毎日新聞社（1936）『中京名鑑』
西村はつ（2002）「中京金融界の動揺と明治銀行—明治銀行の休業と債務整理過程を中心に—」『地方金融史研究』第 33 号
同（2008）「有価証券所有からみた名古屋有力 3 行（愛知、名古屋、明治）の経営（1920-32）」『地方金融史研究』第 39 号
樋口弘（1940）『日本財閥論 下巻』味燈書屋
牧幸輝（2011）「豊田利三郎と豊田業団—経営構想、企業家ネットワークと同族経営体制」『経営史学』第 46 巻第 2 号
松下伝吉（1937）『中京財閥の新研究』合資会社中外産業調査会
森川英正（1981）『日本経営史』日本経済新聞社
村上はつ（1979）「明治・大正期における名古屋旧有力商人の企業者活動」『経営史学』第 14 巻第 3 号
山口達郎、渡部茂（1935）『人と力』日本公論社
吉田浅一（1953）『名古屋時計業界沿革史』商工界

以上